

2024年11月23日

地車の歴史講演会

～ 資料 ～

コミュニティ安倉 歴史・公園部会

其の壹 (だんじりとは…)

だんじりとは、神社の大札祭で氏子達が神に奉納する物のひとつです。

現在、関西圏(東は三重県から西は岡山県)それぞれの地域で、多種類のものが存在し、様々な形のものがああります。

まただんじりの表記もいろいろで、「地車・壇尻・段尻・台尻・壇車・楽車」と記されたりします。

淡路島では布団太鼓台を「担ぎだんじり」、岡山県では船形のを「船だんじり」というなど、地域によつて形も呼び名も異なっているが、我々が思うだんじりというのは、摂津・河内・泉州(もちろん安倉も)で曳かれているもので、そのほとんどは「地車」と表記され、「だんじり」と呼ばれています。



担ぎだんじり (兵庫県淡路島)



船だんじり (岡山県)

だんじりの発祥は今から三〇〇年以上も昔、大阪の天満宮というのをご存知でしょうか…?

今や地車といえ、だんじり祭りである有名な岸和田が本場・発祥地だと思っっている人も少なくないでしょうが、岸和田がだんじりの発祥地というわけではありません。

日本三大祭のひとつである大阪の天神祭では、元禄(二六八)から享保(二七三五頃まで)年間にすでに地車が登場しており、安永五年(二七八〇)には天満宮に八十四台もの地車が宮入り奉納されたという記録が残されています。

では、岸和田のだんじりはいつ頃からだったのでしょうか…。

岸和田の祭りの始まりは、元禄二六年(二七〇三)。岸和田城主岡部長泰公が稲荷祭を行ったことからだといわれています。当初は、今のようないきなりだんじりがあつたわけではなく、太鼓を打つ人が、長持と呼ばれる大きな道具箱のようなものに車輪をつけた、屋根のない殺風景なものに一人だけ乗る形のもので、現在の地車とはかけ離れたものでした。それから天明五年(二七八五)に、岸



和田・北町の油屋治兵衛が世話人となり、彫り物のたくさんある立派な地車(中古)を泉大津より購入したのが、現在の地車の前身だったといわれ、その後、岸和田の大工が独自の地車(現在の地車)を作り出していくこととなったのでした。

したがって断定はできませんが、祭りやだんじりの発祥は大阪天満宮で、だんじりの形が伝播されその技術や文化が飛躍的に発展・普及したのが岸和田だと考えられます。

さて、先述の岸和田の大工の技術が生み出したといわれる独自の地車は、「下だんじり」というもので、現在では



上安倉だんじり (住吉型)

安倉南だんじり (住吉型)



岸和田型と呼ばれるものだけです。

その他の地域の地車は「上だんじり」と呼ばれ、上だんじりには、堺型・大阪型・住吉型・神戸型・交野型・北河内型・石川型・吹田型・大和型・宝塚型など多くの種類があります。



堺型



神戸型



大阪型



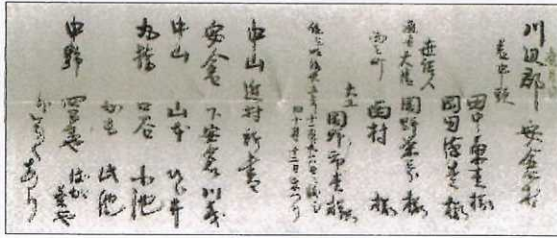
宝塚型

ちなみに我が上安倉・安倉南の地車は、ともに上だんじりで住吉型と言われるものです。次回では、上だんじりで住吉型の上安倉地車について、もっと詳しく話していきたいと思います。

其の式（上安倉地車について）

『上安倉地車』は今から百一十年前、明治二十五年に大阪住吉村（現在の大阪市住吉区）より入手したものがあ

ります。大阪から安倉村に地車が来た理由については、様々な説を聞くが、購入先である地車大工屋に現在も残っている請取帳（※1）から判断できる中で、私が一番有力だと考える説をお話しまし



▲請取帳(※1)

明治二十五年大阪の住吉村にあった地車大工屋『大佐』では、十二代目川崎仙之助、十二代目宗吉（長男）、安次郎（次男）の三人によって、年間二〜三台の地車を新調していました。其の頃地車

は、注文によって作られるものだったが、『大佐』では、常時必ず一台は作り置きされていたと思われます。

当時、安倉村の世話役人達は、安倉住吉神社の本宮である大阪の住吉大社に、少なくとも年に一度は詣出ていたであろう其のときに、住吉大社横にあった『大佐』で、現在のの上安倉地車（作置き地車）を見つけ、一目で気に入り購入を考えたものだと思います。

しかし、その頃安倉は、上・下（南）ともに太鼓台を持つており、秋祭りにはその2台の太鼓台を担いで村内を練り歩いていたので、新しい地車を急いで購入する必要はなかったと思われませんが、安倉が地車を購入する二年前の明治二十三年に、隣村の伊丹荒牧が安倉と同じ『大佐』の地車を購入していることから、強いライバル意識が働いて、太鼓台を持つていたにも関わらず即刻購入するに至ったのかもしれない。（太鼓台は

▼今もなお尼崎市東大島地区にある太鼓台



現在、尼崎で保存・巡行されているので後日また：)

世話役人達は『大佐』で見つけた地車の素晴らしさを、早く村人に伝えたいと、手付けをうち、自分達の手で運べる鬼板（※2）だけをすぐに安倉に持ち帰ったといわれています。



▲鬼板(※2)〈上安倉地車〉



▲鬼板(※2)〈安倉南地車〉

もちろんその素晴らしさは説明するに及ばず、鬼板を見ただけでもわかる程で（後に大佐の地車は独特の雰囲気を持ち、地車の中でも格別人気が高く、有名となる）、これが太鼓台を持つていながらも地車購入を決めた一番の理由である事は間違いのないと思います。

先に述べた請取帳によると、地車の引渡し日が明治二十五年十一月二十六日（旧暦の十月八日）、旧暦で行っていた秋

祭りの四日前（大安と記されています。ばらした地車を大阪住吉浜から船を使い牛車もちい、安倉まで運ぶ事は容易ではなかったはずだが、それを安倉村の大杵氏（藤本松之助宅）の庭に持ち込み、さらに秋祭り曳行に間に合うように組み立てを行つたと思われま

▼何年時が過ぎても祭りに対する気持ちは変わっていません



其の参 (青年団と保存会)

上安倉地車がここ安倉の地に来てから百二十年。

明治、大正、昭和、平成と時代を過ぎてきました。当初、地車は『若中―わかなか―』と呼ばれる青年達を中心に曳行されてきました。そして、昭和十四年『若中』は『青年団』という名前に改称されました。

昭和四十年頃までの安倉村内の道はほとんどが地道で舗装もされておらず、祭り前には必ず道を補修しなければ、地車を曳行させることなどできませんでした。青年団は祭り前になると、リヤカーや馬力車、皿箆などを使って土砂を運び、道のでこぼこをならしたり、穴を埋めたり、石を拾うなどして、祭りを行



うために連日遅くまで大変な作業を続けました。それでも、地車の重量は三トンもあり、補修した穴に重みでコマが取られてしまうと横転したり、大屋根を飛ばしたりすることもしばしばあったといえます。その度に地元の大工さんで修理し、何とか曳行を続けるものの、長い年月による彫り物の黒ずみや柱の歪みズレで、徐々に曳行もままならなくなってきたのでした。

昭和五十八年・・・新調からすでに九十三年が経っていた年のことでした。

これから地車をどうするのか・・・村内の役員や青年団は何度も何度も話し合いを持ちました。地車の購入先だった『大佐』は昭和三十年頃、すでに地車大工からは退いていたために、『大佐』での修理はできません。そこで地車で有名な大阪岸和田にある『吉為工務店』に修理を依頼することになりました。吉為工務店からは、同じ位の地車を新調するなら約八千万円(昭和五十八年頃です)できるとの提案もあったのですが、当時の役員や村民が惚れ込んで手に入れた地車です。なんとか残したい思いが強かったのでしょう・・・。

黒ずんでいた彫り物を洗いをかけ(特殊な洗浄液で洗う)、支柱四本を残しながら、歪みや劣化が激しい部分は

新しく入れ替えました。そして台八(足回り)の安定性を考え、泉州地方に多く見られる上地車の形にしたといいます。勿論大佐独特の持ち味、特長はしつかりと残しながら、約二千五百万円(当時)をかけての『上安倉地車昭和 大修理』となったのでした。



修理前▲



▲修理後

またこれを機に、地車の管理・運営にもっと力をいれるべく、青年団とは別に『安倉地車保存会』(上・南)を発足さ

せました。上安倉地車保存会は大修理を終えたばかりの地車(現存)を管理し、安倉南地車保存会は大鼓台を下取りに出し、地車(現存)を新調する準備に入りました。

安倉地車は年に一回の秋祭りに加え、市の協力要請があれば、宝塚祭りや様々な祝い事などに積極的に参加協力してきました。

その安倉地車保存会も今年で二十九年目を迎えます。今後も安倉の祭りや地車の伝統を守り、安倉をますます発展させ、大切に次世代へと継承していきたいと思えます。

今回は、『安倉南地車新調と地車の軌跡』について書いてみたいと思います。

〈上安倉地車保存会〉



其の伍 (上安倉地車彫刻)

今回は、上安倉の「地車彫刻」を紹介しようと思います。

地車には様々な箇所彫刻が施されていますが、何が彫られているかご存知ですか？

彫刻の種類はいろいろですが、大きく分けると「神話もの(説話もの)」「武者もの」「中国もの」「瑞獣(ずいじゅう)もの」があります。

安倉の地車は、二基とも彫り物地車のメインと言われる三枚板(※1)には、武者ものが彫刻されています。



▲見送り三枚板(※1)
〈地車後左側：木村又蔵勇戦〉

武者ものには時代によって彫刻に制限があったといわれ、江戸時代に作られたものは徳川幕府の影響で「豊臣後法

度(ごはつと)」などがあり、豊臣に関する彫刻は一切できなかったようですが、明治時代になって、幕府も滅びていく中で、地車の彫刻にも秀吉の出世物語や大閤記など彫刻されるようになったといえます。このように彫り物の種類から時代を感じるのも面白いと思います。

ちなみに、明治二十五年作の上安倉地車には豊臣側の武者、加藤清正らの勇戦が、昭和六十年作の安倉南地車には真田幸村らの夏の陣が彫られています。

それでは、「彫刻の種類と各部所」を次にあげておきますので、秋祭りの際に、ぜひとも地車の彫り物をじっくりと堪能してください。



《拝懸魚》
おがみけんぎょ

〔上安倉地車〕

●見送り三枚板 (三枚に繋がり有り)

地車後正面 〓 加藤清正勇戦

地車後左側 〓 木村又蔵勇戦

地車後右側 〓 後藤又兵衛勇戦

●脇障子 (左右に繋がり有り)

地車正面右 〓 平敦盛

地車正面左 〓 平敦盛を呼び戻す
熊谷次郎直実

●隅障子 (左右に繋がり有り)

地車正面右 〓 神功皇后、応神天皇平産す
地車正面左 〓 応神天皇を抱く竹内宿禰

●勾欄 (地車一周で繋がり)

富士の巻狩

●縁蔓 (地車一周で繋がり)

一の谷の合戦

●泥幕

前(花戸口) 〓 司馬温公のカメ割り

左二枚 〓 源義経八艘飛

右二枚 〓 平景清鏝引き

後 〓 那須与一 扇の的

●拝懸魚 榊名田姫(大屋根)

〔安倉南地車〕

●見送り三枚板 (三枚に繋がり有り)

地車後正面 〓 真田幸村勇戦

地車後左側 〓 木村重成勇戦

地車後右側 〓 本田忠朝勇戦

●縁蔓 (地車一周で繋がり)

牡丹に唐獅子

●泥幕

前(花戸口) 〓 平景清鏝引き

左二枚 〓 巴御前

右二枚 〓 平敦盛を呼び戻す
熊谷次郎直実

●拝懸魚

朱雀(大屋根)



其の六（地車の準備について）

毎年、九月も半ばを過ぎると祭礼に向けて地車の準備が始まります。

秋祭りとは、地車に神霊を宿して曳行することで神様の御利益を、村内に受け与え五穀豊穡を願うものであります。

しかし、地車本体には神霊は宿らないということをご存じでしょうか？

神様を招くには神の依りつくところが必要なのです。

神様の依りつくところを、依代といい、依代には植物の枝葉や岩石、旗、幟、御幣などあらゆるものがあるといわれています。そして神霊の依りついた物体を祭る神聖な場所が地車本体ということになるのです。

では、御幣や地車はどのように準備され祭り当日を迎えているのでしょうか？

祭り三週間前、「コマの引き揚げ」と「神の依代である御幣作りの準備」に入ります。

男性会員は、1年間池に漬け置いたコマ(コマが乾燥して割れない為に秋祭り終了後、漬けている)を引き上げる作業をしています。コマは松の木の輪切り

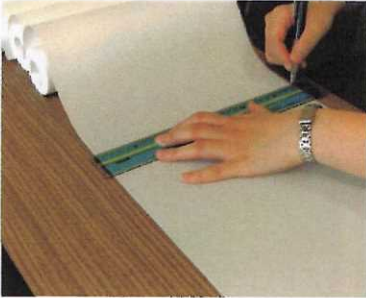
で直径二尺・幅九寸五分と、それだけでも重いものですが、水を含んだコマは想像以上に重く、池からクレーンを使って引き上げ、地車小屋まで運び込みます。

それを真水で丁寧に洗い、二週間乾かしておくので、こうすることで、コマは適度な水分量を内側に含み、車のタイヤでいうと

空気圧のようなクッション効果をもち、そして表面は本番までに乾燥し、適度な強度で曳行時、地車の重さにも削りすぎることなくちょうどいい状態で曳行できるようになるのです。

その間に、女性会員は「御幣作りの準備」に入ります。御幣作りは女性会員の大切な仕事になっています。

巻紙に丁寧に寸法を取り、蛇腹に折り重ね、重しをして二週間紙の巻癖を取るために寝かせておきます。ひと巻30mの巻紙を、一五本以



上寸法取りをして折っていく作業はなかなか大変ですが、とても神聖な気持ちになる作業のひとつです。

祭り一週間前、寝かせておいた巻紙は癖もきれいにとれていきます。蛇腹折り部分を一枚一枚切り離し、寸法通りに刃を入れていきます。神様の依代となる御幣なので、刃を何度も

取り換えながら、ひとつひとつの作業を大切にこなし、出来上がった御幣は三又の角材に

取り付け、紅白の水引で結び、上安倉では御幣がバラバラにならないように御幣と同じ紙で作った輪で、ひと房ごとに止めています。こうすることで地車の獅

また宮入りや蔵入れ、ご祝儀を頂いた時に振る御幣は、写真のように地車に付けているより、少し小さめの御幣を別に作っています。

そして同日、「住吉神社の幟立て」や地車の最終準備の中で、もともと神経を使う「コマの取り付け」、コマが動きやすいようグリスの塗り込み、張采棒と台八のロープ締め、上からさ

らしでしっかり巻き上げ

る、これは地

車の動きがスムーズになる為の一つです。

他にも提灯の取付けや太鼓の備え付けなど細々とした作業が多々あります。

でも準備も祭りの一環だと、会員は大変ながらも準備に時間を割き、また楽しんで勤しみ、祭り当日を幾つになっても今か今かと待ちわびているのです。



囃もしつかりと見ることができるようになります。



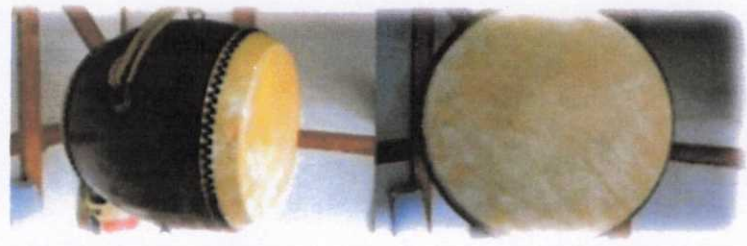
其の九 (地車囃子について)

だんじりに欠かせないもののひとつとして、「囃子」があります。

囃子は「鳴り物」と言われ、祭礼では「大太鼓」・「小太鼓」・「鐘」を使つて奏でます。もちろんその三種だけではなく、笛や弦楽器を使うところもありますが、上安倉では「大太鼓」・「小太鼓」・「鐘」を使っています。

上安倉の「太太鼓」

「太鼓」は、皮が張つてある面の直径は一尺九寸(約五十八センチ)で長さ二尺三寸(約七十七センチ)、胴は樺(ケヤキ)材です。平成十年「北本太鼓工房」に皮の張り替えを依頼した際にわかったことなのですが、それまでに皮の張り替えは十回行われており、現在の大太鼓は約百年位前のもので



大太鼓▶

あるとのこと…。

そこで安倉の長老に尋ねてみると、明治二十五年、新調地車を購入してきたとき、先代の太鼓台(現在、尼崎東大島地区地車(其の八参照))に使っていた大太鼓を新調地車(現在の地車)に乗せようとしたところ、サイズが合わなかったというので、慌てて大阪まで太鼓を買いに行つたということです。ということは、現在使用している大太鼓は、地車新調と同じ時に入手したもので、地車と同じく百二十年の歴史があるものという事です。

「小太鼓」は平成六年に購入したもので、皮の部分が一尺一寸、樺材で購入前は、平太鼓を使い、小太鼓はあまり使つていませんでした。「鐘」は青銅の鑄造で作られた釣鐘の喚鐘を使用しています。太鼓をたたくものを「撥(バチ)」と



小太鼓▶

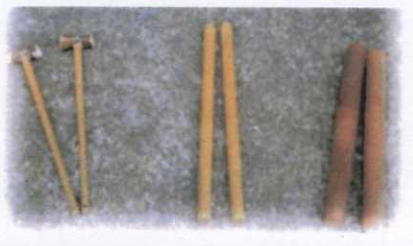


◀ 鐘

言い、樺や桜の木でできています。

鐘は鹿木(シモク)と言う鹿の角を竹(他の木も有り)にさしたものを使用してたたきます。こうした囃子の小道具もまた大切な歴史のひとつとして大切に継承していきたいものです。

さて、上安倉の地車囃子は、「道中囃子」「角を曲がる手前、地車が止まるとき」の囃子」「地車を九十度曲げるとき」の囃子」「宮入り・蔵入れ時の囃子」と大きく分けて四つの囃子を叩いています。上り坂や下り坂などは道中囃子に強弱をつけるなど、囃子の微妙な違いを聞き分けることで、地車がどういう動きをしているのかがわかるのも地車曳行の楽しみのひとつとも言えます。ただ、今私が気になっていることのひとつに…



撥(バチ)▶
左：鐘用
中：小太鼓用
右：大太鼓用



▶ 囃子に合わせて方向転換。
囃子の調子で曳行も頑張れます。▼



でも問題になりつつある「均等叩き」です。ゆつくり歩く、早めに歩く坂道、曲がり角などの微妙な違いを叩き分けず同じリズムを叩き続けるやり方が主流になりつつあることです。果たして安倉はこの先、大丈夫なのでしょうか？

もちろん、安倉は太鼓の練習も、囃子の継承も若者達を中心に頑張つてくれています。この頑張りや地車曳行が続く限り、ずっと継承していつてくれることを期待しています。

どうかこれから鳴り物に携わる方々に「早く進む」「止まる」「曲がる」という地車の動きを「囃子」で表現することの大切さを継承していただきたいと思う次第です。

【この資料に対するお問い合わせ先】

コミュニティ安倉（安倉地区まちづくり協議会）歴史・公園部会

〒665-0822 兵庫県宝塚市安倉中 2 丁目 2-1

E-mail: akura_machikyou@knd.biglobe.ne.jp

ホームページ： <https://akura-machikyou.jimdofree.com/>



ホームページQRコード